福崎町文化財探訪記（2）

福崎町教育委員会　出田　直

はじめに

平成20年度は福崎町の中でも、文化遺産に大きな光があてられた年でもありました。西田原（北野）の古墳公園の整備や南田原（中島）から町内最古の弥生土器が見つかったことなどが上げられます。

今回は、前回の文化財探訪記の続きから、福崎町の歴史の一端に触れて見ましょう。

探訪記

○月○日　今日は、あいにくの雨模様ですが、雨の中の散策も一味違ったものになります。市川に西岸から東に渡るには、いくつかの橋を利用することになります。今回は、山崎から井ノ口へと渡るために「月見橋」を渡ることになります。「月見橋」とはなんとも風流な名前ではないでしょうか。ある説によると、この橋の前はつり橋で、そこから眺める月が美しかったので「月見橋」と名がついたのではということでした。月見橋の前は、渡し舟があった場所でもありました。

雨に少しぬれつつも橋を渡り終えると、国道の向こう側に一つの石碑が見えます。大きなもので180センチ以上はあるようなものです。花崗岩という硬い石で作られていますので、残り具合もいいようです。石碑に近づくと何やら文字が彫りこまれています。この内容を解読したものを参考にすると、「辻川の大庄屋三木家がここにあった、大岩を崩して溝を作り、下流の村々の米の取れ高が大いに増えました。それに感謝した、下流の9か村の人々が記念に石碑を建てたことが記されています。時に天保十四年（一八四三）のことです。」この石碑は『新渠碑』という名前で知られています。ここに登場する水路は「堰溝（ゆみぞ）」として知られており、ちょうど生野街道沿いに流れる水路として今でも使われています。

その石碑を過ぎて堰溝沿いに歩いていくと恵美須神社の看板が目に入ります。恵美須神社を目指して進み、井ノ口の公民館横の路地を山に向かって歩いていきました。山の中腹に舗装された道があり、その道に沿って歩くと恵美寿神社につきました。井ノ口の恵美須祭りは、西宮よりも1月遅れで行われますが、「本家に気を使って遅くしているのですよ。」と教えてもらいました。雨も少し強くなってきましたが、本殿でお参りし次の場所を目指して歩いていきました。中腹の舗装道を下っていき、井ノ口墓地に向かって左に曲がりました。山のふもとに井ノ口墓地は建てられています。この中に、短歌で有名な岸上大作の墓があることを聞きました。岸上大作は、井ノ口で生まれ福崎高校を卒業した方で、国学院大学での活躍から、多くの人に注目されました。六十年安保といわれた時代を象徴し、当時をうたった短歌は高く評価されました。若くして自ら命を絶った、岸上大作は今もなお、多くの人に親しまれています。その墓は、井ノ口墓地の中腹に両親の墓と共に並んでいました。黒い墓標は雨によって清められ一層黒く光っていました。その雨は、岸上大作の死を悲しむかのようでもありました。

岸上大作の墓標から南を向くと北野の村が見えます。その前は、ほ場整備によって整然と並んだ田が見られます。その中に、ひときわ目立つ形で大きな塚が見えました。

その塚に行く途中には、先ほどからの雨脚も弱りましたが、農道は水溜りがあり歩きにくい状態でした。大きな塚まで行くと、あたりはきれいに整備されていました。まるで公園のようになっていました。奥に進むと看板が目に入りそこには、「東広畑古墳」と記してありました。東広畑古墳公園ということが判りました。説明板からすると、今から1400年前の古墳で丸い形をした円墳ということがわかりました。もともとは、このような形だったと思われたのでしたが、戦後に土が取り除かれて石室がむき出しになってしまったようです。石室も崩壊の恐れがあって、保存する意味も込めて公園にしたということです。いつもは、石室の中に入れないようになっているようですが、外からでも中の様子が良くわ

かります。握りこぶしくらいの石が敷き詰められている一番奥に四角い石が置いてありました。石棺の一部ということでした。

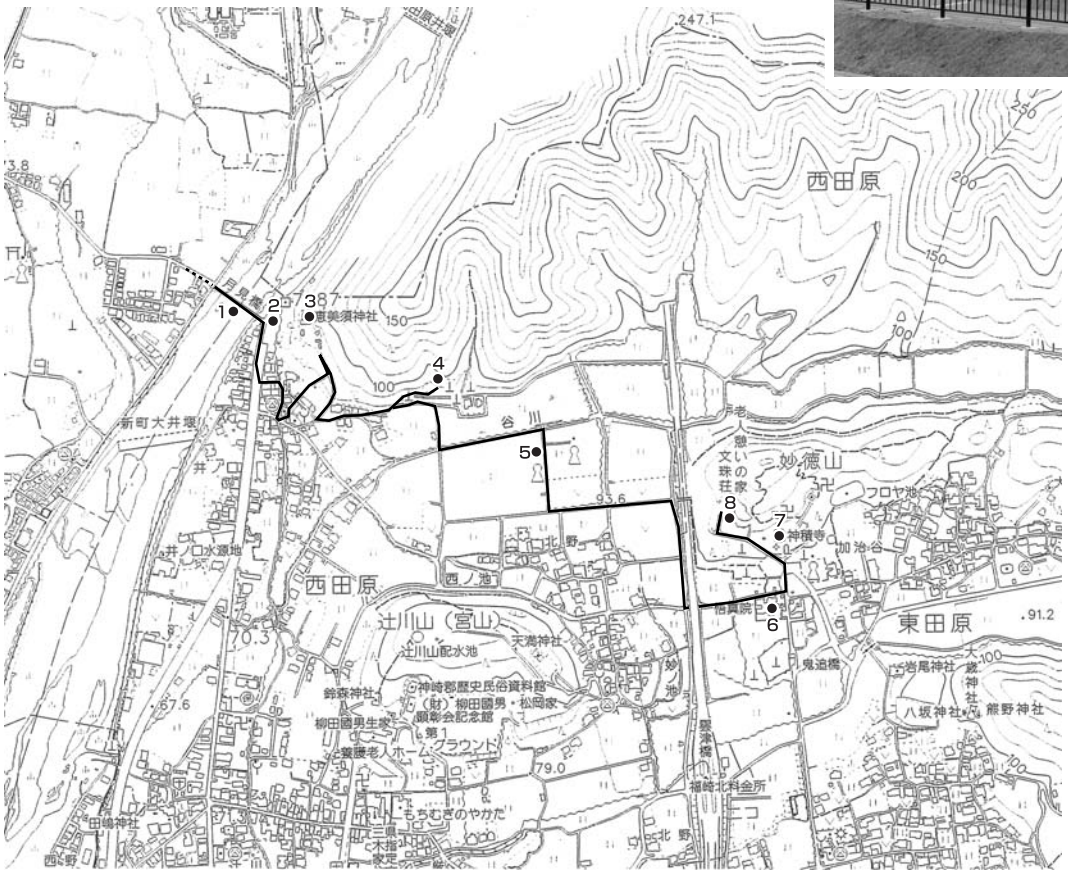
雨も上がり、傘を閉じつつ歩いていくと目の前の山に緑色の屋根が見えました。「文珠荘」ということでした。

文珠荘の横には、天台宗の古い寺で妙徳山神積寺というものがあるということです。そこに向かって進んでいくと播但自動車道の高架をくぐり細い舗装道を歩いていくと右手に寺の建物が見えてきました。聞くと、悟真院という寺の一つだそうです。この悟真院の唐門も町指定文化財になっている貴重な遺産ということでした。

悟真院の東には弁財天を祭ってある弁天堂と弁天池がありました。新しくした弁天堂には、弁天様と15童子が祭られているということです。この池から、文珠荘のほうに行くと、石段が見られます。石段の下には百度石と刻まれた石碑があり、百度参りに利用されるものということが判ります。花崗岩で作られた石段を登り、登ったところにある石灯籠を過ぎると本堂が目に入ります。本堂に行くまでに、石灯籠の横の説明板に目をやると、石灯籠のことが書いてありました。石灯籠は、両親の菩提を供養するために奉納されたものだということがわかりました。それと同時に、古い石段も奉納されたようです。天和三年（一六八三）のことでした。昔の石段は、作られてから179年後にお参りしやすくするために本堂に向かって左側の通路に石段を作り直しました。その後、元あった場所はがけのようになりましたが、平成七年に今の石段が作られたということです。

石段の上り口の左側には、阿弥陀如来の梵字が刻んである石碑が見られます。梵字を種子といいそこから、阿弥陀種子板碑という名前で知られています。この板碑の下には、四八文字でいわれが彫られています。それからすると、安喜門院という人の百か日の供養塔ということが判ります。安喜門院は後堀河天皇の皇后で弘安九年（一二八六）に亡くなった方で、天皇とゆかりの強い方ということが判ります。

神積寺には、追儺という行事が鎌倉時代から伝わっており、今でも1月の成人日に古式ゆかしくとり行われ多くの人で賑わいます。また、知恵の文殊としても知られています。



探訪記主要箇所位置図

1　月見橋
2　新渠碑
3　恵美須神社
4　岸上大作墓
5　東広畑古墳
6　悟真院
7　神積寺
　　石灯籠
　　阿弥陀種子板碑
8　箱式石棺

また、ここのご本尊の木造薬師如来坐像は福崎町で唯一の国指定重要文化財で、もうしばらくするとご開帳の時期を迎えます。ご開帳のためにも、きれいな仏像になってもらうために京都に修理にいかれました。その時には、参拝することが出来ることでしょう。

このように、神積寺には多くの貴重な遺産が残されています。

神積寺を後にして、文珠荘に行くと、赤い色をした彫刻が出迎えてくれます。神々の誕生という作品だそうです。その横に、覆い屋が作られている場所があり、のぞくと箱式石棺というものでした。箱式石棺は文珠荘の建設の時に見つかったということです。

その石棺を通して南を向くと、播但自動車道をみながら福崎町のまち並みを望むことになりました。福崎町には歴史的な大切なものが多くありますが、ここから望むまち並みは、都市化の波が訪れている様子がよくわかるものでした。主要道の沿線は都市化していますが、一歩横にそれれば、自然豊かな歴史ある場所がまだ多く見られます。

雨の中の散策でしたが、最後には雨も上がりすがすがしい散策となりました。

次回の歴史散策でお会いしましょう。

第二十七回 町展作品募集

第二十七回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりおまちしています。

◆会期 五月二十二日（金）～五月二十四日（日）

◆会場 エルデホール

◆部門 日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る

◆作品搬入 五月十六日（土）午前九時～午後四時

◆審査員

日本画　青田　賢蔵
洋　画　門脇　正弘
書　井上　映粧
写　真　北村　泰生
彫塑・工芸　牛尾　啓三

山桃忌奉賛 第二十四回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を忍ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌会は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。

本年の短歌会は、左記の要領で作品募集の予定です。

記

日時 平成二十一年八月上旬

場所 柳田國男・松岡家顕彰会記念館二階

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

現金または小為替

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内文化協会事務局　宛

締切 平成二十一年六月十三日

賞 通泰賞・町長賞・議長賞・教育委員会賞・顕彰会賞・文化協会賞・商工会賞・JA兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作数点

選者 楠田　立身　先生（兵庫県歌人クラブ代表）

＊表紙の写真＊

東広畑古墳

平成20年度に古墳公園として完成しました。今から約１４００年前に造られた古墳で横穴式石室を持ちます。直径16ｍ、石室長10.4ｍです。中には、石が敷き詰められた床面があり、石棺の底石も残っていました。当時の供え物であった、土器や勾玉などが見つかりました。地域の歴史遺産を大切に守っていきましょう。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十五号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には、大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございました。皆様方に、心からお礼申し上げます。